

周作クラブ会報

(第58号)
2015年2月20日発行

周作クラブ

◆主な記事◆

新年会報告	(2頁)
特別寄稿	(3頁)
長崎文学館	(6頁)
周作クラブ長崎	(8頁)
国際シンポジウム	(10頁)

報告——文化功労者と宇宙棋院

黒井千次顧問が新たな文化功労者に

平成二十六年年度文化功労者になられた黒井千次顧問と宇宙棋院の思い出

高橋千劔破
たかはしちちはや
(周作クラブ幹事)

会長と顧問が文化功労者

昨春秋(二〇一四年十月二十四日)、平成二十六年年度の文化功労者が発表されました。何となく黒井千次さんが指名されるような気がして、ドキドキしながら発表を待ちました。というのは三年前の平成二十三年、加賀乙彦さんが文化功労者になられたからです。加賀さんは昭和四年四月のお生まれ。黒井さんは昭和七年五月のお生まれで、



加賀乙彦会長 (於新年会)



黒井千次顧問 (於新年会)

加賀さんの三歳年下です。

加賀さんと黒井さんが周作クラブの会長と顧問に就任されたのは、平成十六年(二〇〇四年)九月の事です。周作クラブの創立は平成十二年(二〇〇〇年)のことですが、当初は加藤宗哉さんを代表世話人として発会し、その後、宮辺尚さんと高橋千劔破の三人が代表幹事となって、会の運営に当たってきました。ですが、創立から四年目を迎えたころには、会員数が四百人を

超えるという大所帯となり、会長と顧問をお迎えしよう、という事になったのです。

加賀さんは会長就任のあいさつで、「代表幹事三人は僕の古くからの友人で、何か、はめられたきがしないでもないが、引き受けた以上は、一生懸命やります。…皆さん、これからは大いに遊んで、お酒を飲んだり、お酒を飲んだふりをして、何でもいいから人をだまして、遠藤周作さんの真似をして駄目な人間になりましょう」と。

また黒井さんは、

「加賀さんが会長だということで、どうせろくな会にはならないだろう。それなら顧問をやらせていただこうと思つた。遠藤さんには馬鹿にならなければ駄目だと散々いわれた。しかし馬鹿になるのも才能や努力がいる。遠藤さんがあれだけ馬鹿なことをやれたのは、天賦の才に恵まれていたから。加賀会長は駄目な人間になれと仰つたが、加えて私は、馬鹿になれといたい。だ

めだ馬鹿な人間の集まりというものがどういふものか、皆さんの双肩にかかっております」とあいさつされました。

その黒井千次さんが文化功労者になられ、わが周作クラブでは、お二人の文化功労者を会長と顧問に戴くという、何ともぜいたくな会となりました。駄目と馬鹿に大いにハクがついたというわけです。

小金井のお助けジイサン

ところで、黒井さんは、宇宙棋院の創立メンバーの一人です。宇宙棋院は、遠藤周作先生が立ち上げた囲碁クラブですが、遠藤先生より碁がヘタというのが入会条件です。もう一つ、作家か新聞記者か編集者であること、ただし、女性は身分問わず(とはいえず藤先生のメガネにかなわなければなりません)です。遠藤先生はほとんど碁が打てませんから、ド素人の文壇囲碁クラブということで、あれは碁の会ではなく四の会だなどと揶揄されてきました。じつは高橋も創立メンバーの一人です。その宇宙棋院が、「名人戦」や「棋聖戦」「本因坊戦」を行ったので、まさに烏も鷺もビックリです。

そのうち、何とか皆が、多少は碁が打てるようになりました。ところが遠藤先生はさっぱり上達しません。ついに勝てる相手が、黒井千次さんだけになりました。そこで先生が黒井さんにつけたアダ名が、「小金井のお助けジイサン」。黒井さんのご自宅は小金井市です。皆に負けて口悔しい遠藤先生にとつて、唯一の救い手が黒井千次さんというわけです。

ところで、宇宙棋院は今も続いている(飲み会だけです)、会長は黒井千次さんです。

(写真/田村百合子)